

## 英語教育と語彙指導をめぐって

— 中学・高校と短大をつなぐ —

瀧口 優

### はじめに

「なぜ日本人は英語が話せないか」\*<sup>1</sup>の中で鈴木孝夫氏は、日本の身近なことをもっと英語で表現することを主張している。前後関係を抜きにすればそれは重要な指摘であろう。そして身近なものを表現しようとするときに語彙を知らなければ話せないのも確かである。外国語を少しでも学んだ者にとって、自分がその表現を知らないためにコミュニケーションの機会を失ってしまったという経験は誰でも持っているものである。

語彙指導という場合は、ある程度覚えるべき語彙があつて、それをどのように身につけていくのかが想定される。したがって中学校や高校では学習指導要領が一つの目安となり、高校入試や大学入試というのが意識される。しかし実際の「語彙指導とは何か」と問われれば、なかなか明確な回答は出されていない。

そもそも語彙指導という場合には、誰が学ぶのか、どこに住んでいるのか等によって多少のズレが生じることは当然であり、それが文法指導とはニュアンスが違ったものになることは認識しておかなければならない。英語教育誌の特集でも「語彙」をテーマとしたものはきわめて少なく、実際にこれだけの語彙を身につければよい、という提起もほとんど出されていない。最近では既に休刊になっている「現代英語教育（研究社）」\*<sup>2</sup>が93年に「語彙指導を充実する」、「新英語教育（三友社）」\*<sup>3</sup>が97年に「単語で広がる英語の世界」を特集している程度である。

語彙指導の流れという点では、戦前に語学教育研究所のパーマー博士が1942年に提起した「基本英語1000語」\*<sup>4</sup>というのが一つの先駆的な提起となっている。もっとも彼は「ある『標準的なテキストの簡略化』の基礎として選定しうる種々の段階のうち、3000語の大きさがもっとも適当であろう」\*<sup>5</sup>（The Grading and Simplifying of Literary Material: Institute for Research in English Teaching/Tokyo.1934）と言っているので、理想はそのあたりだろうか。また日本に限ったわけではないが、ベーシック英語の850語も視野に入れないといけない。「English Through Pictures」\*<sup>6</sup>として1945年には初版が出版されている。

戦後の学習指導要領\*<sup>7</sup>では、1951年の改訂（英文も含めて英語だけで数百ページに及ぶもの）で、Thorndikeの「Teacher's Wordbook of 3000 Words: Teachers College: Columbia University. 1944」を参考にしながら、中学校・高校の手引きとしてつぎのような数字をあげている。

中学校 1 学年	300ないし 600語	高等学校第 1 学年	600ないし1500語
2 学年	400ないし 700語	2 学年	700ないし1500語
3 学年	500ないし 1000語	3 学年	800ないし1500語
合 計	1200ないし 2300語	合 計	2100ないし4500語

ただし当時は中学校で週に 5 時間英語をやっていた時代なので、現在と単純に比較することはできない。これが1969年の改訂では、英語の時間が週 4 時間になっており、語彙についてはつぎようになる。

中学校 1 学年	300ないし 350語	高等学校初級英語	600から 1000語
2 学年	300ないし 350語	英語 A	1200ないし 1500語
3 学年	350ないし 400語	英語 B	1200ないし 2100語
	950ないし 1100語		

また1977年 (中学) 78年 (高校) では高校の科目構成が変わったことや中学校が週 3 時間になるという前提だったので、つぎのようになっている。

中学校 1 学年	300ないし 350語	高等学校 英語 I	400から 500語
2 学年	300ないし 350語	英語 II	600から 700語
3 学年	300ないし 350語	英語 II B	400から 700語
	900ないし 1050語		1400から 1900語

戦後パターンプラクティスを取り入れられて、繰り返し学ぶことの重要性が言われたが、これも文法が焦点であり、語彙については取り立てて指導法が問題になったことは少ない。90年代に入って第二言語の習得とからんで語彙指導が取り上げられ、盛んに研究書も出されているが、日本の英語教育の分野ではまだまだ緒についたばかりであろう。その中で太田垣正義氏が「語彙指導のメカニズム」\*<sup>8</sup>として、中学生を対象にした詳細な語彙指導の研究をまとめているのが参考になる。

外国語教育において「語彙」の指導はきわめて重要な位置を占めているにもかかわらず実際の指導法や学習法については「入試まかせ」的なところがあって、基準が入試にでるかでないかで判断されることが多い。語彙という重要な問題でありながら、日本の英語教育の中で、体系的に取り上げられることは少なく、どちらかといえば、教科書や教師任せになっていたという状況である。本稿ではそうした中学校や高校における語彙指導の現状をふまえて、今何が求められているのかを明らかにしてみたい。

## I. 中学校における語彙指導の状況

### 1. 教科書を通して

中学校の検定教科書は必ず使わなければならない必修語と、編集者の裁量で選べる数を合わせておよそ1000語程度と規定されている。1996年度の検定教科書をもとにして5つの教科書を調査したところによれば、指導要領で必修とされた語を除くと、449語、508語、481語、588語、549語となっており、若干のばらつきはあるもののほぼ500語前後に落ち着いている。これは指導要領の指定が900～1050語となっている関係からすれば当然の結果であろう。

前述の1951年の指導要領に比べて70%程度に抑えられていることになるが、時間数が6

割に減らされているし毎日継続してやることができないので、むしろ1時間に覚える量は増えているともいえる。しかも様々な体験によって身についた生活知識からの類推やインスピレーションは、過去であればあるほど豊であったことを考えると、現代の中学生は語彙を身につけるのにより困難が増しているとも言える。

また、必修語として「花」(flower)は入っているのに、具体的な花については指定されていないので、実際に英語で表現しようとしたときに具体的な名前が英語で出てこないということになってしまう。

## 2. 高校入試と語彙指導

また高校入試という問題もある。公立高校の入試は、その都道府県内の中学生が使っている教科書を基準にするという厳しいチェックがある。県内で5つ使われていれば、その中で共通の単語は自由に使えるが、ある教科書にしかない単語については必ず注をつけることになっている。

したがって中学校での指導は、いかにして教科書の語彙を生徒達に徹底させるのかということにならざるを得ない。教科書に載っていない単語を覚えても、公立の高校入試では生かされないので、どうしてもあと回しになってしまう。

# Ⅱ. 高校における語彙指導

## 1. 教科書のアンバランス

一方高校ではどのようになっているかと言えば、「はじめに」のところで高校学習指導要領の語彙変遷について触れたように、全体としてはかつてに比べて標準の語彙数が少なくなっている。これは時間数が少なくなっていることにも原因がある。そして教科書の種類が50種類を越えるところまで出されるようになったことが、中学校とは決定的に違うところである。高校は教科書をそれぞれの学校が採択できるが、中学校の場合は最低でも一つの市レベルで採択し、複数の市町村を含めて選ぶことが多い。したがって中学校の教員は自分で教科書を選ぶことができないという問題がある。

学校で教科書が選べるということは学校のレベルによって使われる教科書が違うということである。一方では中学校の基礎からわかってない生徒がこぞって入学する学校があり、他方では東大をはじめとしてほとんどが大学に進学するという高校もある。使う教科書のレベルが違うということは、教科書の語彙数が大きく違うということになる。指導要領の指定する語彙数というものは全く意味をなしていないのが実状であろう。現在の指導要領下での教育課程では、オーラルコミュニケーションA, B, Cと英語Ⅰ、Ⅱそしてリーディングとライティング等という科目が設置されているが、それぞれに教科書が出され、語彙数もバラバラであるから、高校で学ぶべき語彙などというものは示し得ない。

## 2. 高校教科書におけるカタカナ英語の現状

高校における語彙指導のポイントとして英語以外の教科書—数学、地歴、公民、理科、芸術、家庭科等—に出没するカタカナ英語なるものである。少々古くなったが1994年度の教科書をもとにして、そこにカタカナ表記された語彙をもとの言語にして英語の部分为数

えてみた。<sup>\*9</sup>

現代文	60	現代社会	161	地理	151	日本史	52
世界史	69	政治経済	95	倫理	74	数学ⅠⅡ	45
生物	93	地学	89	化学	85	物理	125
保体	158	音楽	243	美術	172	家庭一般	299

(合計で延べ1971語：実質的にはおよそ1200語)

実に英語ⅠとⅡで指定された1000～1200語に匹敵する数である。しかもそのほとんどが名詞である。つまり英語の教科書を使わなくても身近なところで英語の語彙に出会うことになる。この他に新聞や雑誌、テレビなどで出会うカタカナ英語をあわせれば、英語の語彙は相当な数にのぼることになる。

### 3. 大学入試と語彙指導

中学校における高校入試があったように、高校では大学入試の中で語彙が問題となってくる。「試験にでる英単語」「奇跡の英単語」「入試に出る1800語」等々、種類だけでも20は下らない。かつてのように文法の細かい問題が出なくなったのに反比例して語彙の重要性が強調されるようになってきた。

しかし語彙指導という点では、どれだけ多く覚えるかということに主眼がおかれ、どんな語彙をどのように指導するのかという点での論議は少ない。コンピューターに入試問題の英文を入れて、どの単語がよく使われているかをランク別に並べてみたり、大学別に語彙の傾向を取り上げてみたりということになっている。

## Ⅲ. 語彙指導のあり方をめぐって

### 1. 自己表現と語彙指導

外国語教育の中で「自己表現」という言葉が使われるようになって既に30年以上になる。1968年「新英語教育」で、自己表現の意義や実践についてまとめられており、それ以来盛んに取り組まれてきた。「英語による自己表現は戦前の『生活綴り方』や戦後の『山びこ学校』、その他による生活綴り方運動の実践と理論をひきついで誕生した」<sup>\*10</sup>とあるように、日本語の書くことを重視した教育の流れの中で生まれている。

70年代には子供たちに英詩を書かせたりしながら、教科書では出会うことのない自分の語彙というものを蓄えていく指導がすすむようになり、英語は苦手でもこの単語は自分が使ったので知っているという子供たちに出会う。さらに80年代は、英語教育における平和教育が盛んに話題となり、外国の大統領や首相に平和の手紙を送ったり、修学旅行で平和のメッセージを書いてもらったりという、教室の外に出る授業を通して自己表現が広がり、それに付随して語彙も広がっていった。

90年代にはいると、中学校で英語が週に3時間だった生徒達が大学に入学してくることになる。中学校における週3時間というのは実質的にはよくて2.5時間、平均では2.2時間程度になり、行事などで授業がつぶれると、1週間授業がないという状態もおこってくる。語学は毎日学ぶのが望ましいと言われることから考えれば、言葉の習得の上で決定的なマイナスである。だからこそ91年の指導要領では週4時間ができるようにせざるを得なかった

わけであるが、その実現には10年間にわたる「中学校英語週3時間に反対する会」\*<sup>1</sup>等の運動があったことも触れなければならない。

## 2. 辞書指導と語彙指導

教科書を使っている限りでは、辞書の活用についてあまり積極的にすすめられないが、自己表現ということになると生徒は辞書を頼るほかないので、積極的に活用するようになる。しかも自分に必要な語彙を使うわけなので、友達のを写せばよいというわけにはいかない。辞書をどれだけ早く引けるか、言い換えれば意味の分からない単語を辞書で見つけたすのにどのくらいの時間ですむか、というのが積極的な授業への参加の姿勢にも影響する問題である。最近では辞書指導をゲーム的に行って、生徒の授業への積極的な参加を勝ち取っている報告もある。<sup>\*12</sup>

いずれにしても語彙指導をおこなうためには、辞書指導が重要なポイントとなるので、更なる研究が必要である。

## 3. 単語集と語彙指導

上述したように、受験用の単語集は数多く出されているが、自己表現につながるものとなると極めて少ない。基礎といわれているものも指導要領の必修語にいくつか加えたものが多く、それを覚えていても自己表現にはつながらない。

自己表現との関わりでは「たのしい英文法」\*<sup>13</sup>の巻末に977語の一覧がある。子供たちの生活を踏まえたリストで、自己表現を行うにあたってはたいへん参考になるものである。しかしこれも25年前に作成されたもので、名詞のリストなどは古くなっている。

そこでいったいどれだけの単語があれば現在、自己表現がある程度可能になるのかその根拠となる語彙を集めてみたが、手順は以下の通りである。

- (1)「中学校学習指導要領外国語別表2」(文部省89)はすべて入れる(507語)。
- (2)「ライトハウス英和辞典第2版」(研究社)の中学校で学ぶ単語として(\*)のマークがついているもの(788語)の中で、中学校の教科書のいずれかに載っているもの及び3つ以上の教科書で共通に出てくるものをあわせる(461語)。
- (3)生徒へのアンケートを踏まえて、高校生の日常生活で必要と思われるものを場面別に整理して加える。またカタカナ英語や口語表現、熟語の基本的なものに使われている語彙を加える(847語)。
- (4)以上を品詞毎に一覧にしてまとめると；

品 詞	文部省指定	ライトハウス他	日常生活他	合 計
名 詞	189	283	595	1067
動 詞	114	66	143	323
形 容 詞	85	66	89	240
副 詞	37	15	10	62
代 名 詞	45	12	4	61
前 置 詞	26	11	4	41
接 続 詞	8	5	1	14
間 投 詞	3	3	1	7
合 計	507	461	847	1815

結局1800語を越えてしまったが、これらの語彙のうち、名詞を44場面に分けて分類し、その他は一覧表としてまとめた。<sup>\*14</sup>この表からも語数と言う場合、圧倒的に名詞の数で左右されてしまうことがわかる。そして自己表現を行う場合は名詞があれば何とか表現できることを考えると、指導要領の指定はあまりにも名詞が少ないことがわかる。

44の場面は次のように設定されている。

- |             |            |             |               |
|-------------|------------|-------------|---------------|
| 1. 学校       | 2. 職員室     | 3. 家庭科室・科学室 | 4. 体育館        |
| 5. 家の様子     | 6. 自分の部屋   | 7. リビング     | 8. 台所         |
| 9. 洗面所      | 10. 庭      | 11. 食べ物(1)  | 12. からだ       |
| 13. 家族と親戚   | 14. 野菜と果物  | 15. 職業      | 16. マスコミと伝達   |
| 17. 旅行と運輸   | 18. キャンプ場で | 19. 水族館で    | 20. 文化・芸術     |
| 21. 図書館で    | 22. 舞台と劇場  | 23. ファッション  | 24. スポーツ      |
| 25. サファリパーク | 26. 病院で    | 27. ボランティア  | 28. 街の風景      |
| 29. 私の一日    | 30. ショッピング | 31. 休日のドライブ | 32. 人体        |
| 33. 食べ物(2)  | 34. 抽象名詞   | 35. 空港で     | 36. 自然        |
| 37. 環境問題    | 38. 塾と予備校  | 39. 経済について  | 40. 物質・鉱物・貴金属 |
| 41. 社会について  | 42. 駅      | 43. その他(1)  | 44. その他(2)    |

語数の提起という点で、太田垣氏が「(1)語彙指導を前面に出すようにする(2)中学校レベルで2000～2500語を導入し、1000～1500語を使えるように指導する。(3)語彙選定の基準として学習者のレディネスや興味を採用する」<sup>\*15</sup>と提起しているのを受けて考えると、高校の導入として1815語はそれほどずれていないように思われる。なお、動詞の過去形や過去分詞形で不規則に変化するものはそれぞれ一語と数える方法に従えば、ほぼ2000語に匹敵することになる。

#### 4. テーマ別英単語と語彙指導

語彙の量を決めるポイントが名詞であるということは既に触れたが、その名詞を含めて高校生が日常生活の中でどんな語彙に出会っているのか、あるいは触れているのかを2年がかりで調べてみた。<sup>\*16</sup>39のテーマ・ジャンルについて書いてもらい、名詞以外に動詞と形容詞についても聞いてみた。

定時制は生徒の数も少なく、授業で顔を合わせたのは40人前後である。その40人前後から出された単語を整理して並べると、少ない分野でも50個前後、多いものでは150個を超えるものが出てきた。この数をトータルすると3000語は越える。ただし同じ単語が別のジャンルにも登場しているので、実際の数としては2500語前後と思われる。ジャンルがこれで全てというわけではないので、さらにプラスアルファがあると思われる。それらを考慮に入れると高校生が日常生活で触れる語彙は代名詞、接続詞、前置詞等を含めて3500語前後であろう。これが自己表現に必要な語彙と言い切れるかどうかはむずかしいが、一つの資料となるのではないか。もちろん子供たちはそれぞれの興味関心が違っており、自分の得意とする分野では数多くの語彙を知っているが、苦手な分野となればどうしても少なくなるので、自己表現のための語彙を具体的に固定することはむずかしい。

なお英米人の大人が常用するコミュニケーションのための語彙として2700語（派生語まで含めると3800語）という本が出版されている<sup>\*17</sup>。大人が日常生活で遭遇する場面を120に

分類したものであるが、非常に参考になる。またStuart Redman<sup>\*18</sup>は日常使用される語彙を動詞や形容詞を含めて53のジャンルに分類しているが、私が定時制の生徒とまとめた39の分類と比較するとほとんどが重なっている。語彙の内容や地域性による特徴は違っているが、平均的な生活として共通するものがあると言える。

#### Ⅳ. おわりに

はじめにのところで「中学校や高校における語彙指導をふまえて、今何が求められているか明らかにしてみたい」と構えてみたが、実際に様々な資料やデータに当たってみると、「何が求められているのか」に対して、明確な回答が出たわけではない。しかし、今まで語彙指導については、その覚え方や辞書の引き方といった「how to」(どう教えるのか)で終始していたものが、「what to」(何を教えるのか)という分野に踏み込んだのではないか。すなわち、語彙については学ぶ側の生活体験や住んでいる地域、そして人間関係や文化環境によって重要性が微妙にずれていく。そこで名詞以外の語彙についてはある程度確定したとしても、名詞についてはフレキシブルなものにならざるを得ない。それでも中学校や高校においてはある程度共通の語彙が設定できるし、個人的な語彙の枠を加えて、それぞれの分野や地域から生徒の実状に合った語彙の選択が行われ、豊かな自己表現に結びついていく可能性とその手順を示しえたのではないかと考えている。

また教える側としては、地域や文化を背景にしてどのような語彙を身につけるべきかという具体的な目標を持って年間の授業を組み立て、どこまで覚えさせたのかではなく、どこまで身についたのかを検証しながらすすめるべきであるということも重要な課題として提起されている。

第三としては、日本のことを世界に伝えていくために、日本固有の文化や習慣についての語彙も、当然そのリストに加えなければならない。この点についてはVirginia French Allen<sup>\*19</sup>が次のようにまとめているのが参考になる。

##### [The Limitations of Words Lists]

1. Which words must the students know in order to talk about people, things and events in the place where they study and live?
2. Which words must the students know in order to respond to routine direction and commands?
3. Which words are required for certain classroom experience (describing, comparing...)
4. Which words are needed in connection with the students' particular academic interests?

(下線部訳：学生たちが学習し生活している地域の人々や物事、出来事などについて話すために知らなければならない単語は何か。)

この具体的な中身については、別の機会に触れたい。

現在、短期大学で学生と語彙を広げる作業をはじめたところであるが、一つ気になることがある。それは短大に入学してくる学生のイメージするものがどうも決まっていて、「花」というテーマでは定時制の生徒が書いてくれた数の7割程度の花しか出てこない。日常生活の中で花に接する機会が少ないというわけではないと思われるが、受験競争や画一化された高校生活の中で、何か自分を失っているのではないかと感じてしまう。学生自身の意

識を変えていくことも語彙指導の延長として無視できないようである。そして意識を変えるために、学生が学習に参加して、学習を創造していくような授業を通して、「考えさせる」ことが極めて重要になってきているのではないか。

#### 引用・参考文献

- \* 1 鈴木孝夫99「日本人はなぜ英語ができないか」(岩波新書)
- \* 2 現代英語教育93年3月号(研究社)
- \* 3 新英語教育97年9月号(三友社出版)
- \* 4 ハロルド・パーマー42「基本英語一千語」(語学教育研究所編:開拓社)
- \* 5 80「英語教育史資料」第2巻(東京法令出版)
- \* 6 45「English Through Pictures Book」1.2(I.A.Richards/Christine Gibson:YOHAN)
- \* 7 中学校学習指導要領外国語 '51 '69 '77 '98  
高等学校学習指導要領外国語 '51 '70 '78 '99
- \* 8 太田垣正義99「英語教育学・理論と実践の結合」(開文社出版)
- \* 9 瀧口優97「高校教科書に氾濫するカタカナ英語」(新英語教育:三友社出版) 9月号
- \* 10 新英語教育66年12月号(三友社出版)
- \* 11 隈部直光88「週3時間に反対する会」(新英語教育講座1巻:三友社出版)
- \* 12 山梨新英語教育研究会97「豊かな授業づくりを結びつけて」(新英語教育97年9月号:三友社出版)
- \* 13 林野滋樹75「たのしい英文法」(三友社出版)
- \* 14 瀧口優98「ベストメイト高校英単語/基礎編」(三友社出版)
- \* 15 太田垣正義99「英語教育学・理論と実践の結合」(開文社出版) p.68
- \* 16 瀧口優99「定時制高校生の作ったジャンル・テーマ別単語集」(埼玉新英語教育研究会)
- \* 17 J.C.リチャーズ78「目で見えるアクション英単語集1〜3」(オックスフォード大学出版局)
- \* 18 Stuart Redman「English Vocabulary in Use」Cambridge University Press 97
- \* 19 Virginia French Allen「Techniques in Teaching Vocabulary」Oxford University Press 83

たきぐち まさる (英語教育学)